『國民新報』1940年1月7日

[主張]　紀元二千六百年

　十五年！それはかしい二千六百年である。に三十年にる。ものである。のにそのにかんとするであり、のである。一のはを一つにして、一につたので、をれてをしなければならぬである。るがにこそこの紀元二千六百年はがいのである[[1]](#footnote-1)。

　二千六百年！すめらみくにはとの一をつて、彌える日につた。やづアジア十の族を、ありがたきののにし、この神津のあら[た]かさとしさととを、くにけやうと、はつたのである。のをよ。ありがたいがにあるか。こののとしてをこのにけたことはんとせなことであらう。になさにこぼるゝことである。

　三十年！二千四百萬はのありがたきによつて、こののとなつたのだ。そしてや　のたることのにありがたくあることであるかをからずることゝなつたのだ。のは、わがのために、みづく、くさむすとなることをびむことゝなつたのだ。そしてはえあるをり、千に八千に、このの彌榮えをすところのなるとのとなつたのである。

　朝鮮の民よ。古き小さき感情をば、この時にこそ清算せよ。そして祓清められたる新しい、大きい心に生きやう。今や吾等の故郷は小さき朝鮮半島でないのだ。日の丸の御旗の閃く所そこは皆吾等の故郷であるのだ。北は千島、南は新南群島の果てまで、凡て吾等の子孫の守るべき樂園であるのだ。一億の天皇の赤子は凡て吾等の同胞なのだ。吾等の子孫は、忠と力とさへあれば、帝國を背負つて立つ國家の中心人物にもなり得るのだ。未だに取除かれて居ない多少の差別を苦にしてはならない。吾等の忠誠は近き將來にこの差別までも一掃することであらう。而してそれは唯だ吾等の忠誠だけなのだ[。]廣大無邊たる天皇の仁慈は、吾等二千三百萬の朝鮮民衆をば完全なる一視同仁の御懐に抱き給はん日の一日も早からんことを御待ち遊ばさるゝことゝ拜察したてまつるだに畏いことである。

　さらば朝鮮民衆よ。皇紀二千六百年を吾等は何によつて壽ぎ、何によつて記念しやうぞ。それは他ではない。益々積極的に、天皇に對したてまつる忠誠を奮ひ起して、立派な、頼もしき臣民になり切ることにあると思ふ。

1. 「歌」の文字は誤植であろう。単行本『同胞に告ぐ』では消されている。 [↑](#footnote-ref-1)